《資料》

徳山敬猛『農業子孫養育草』（文政九年）

神立春樹

（1）

まえがき

ここに翻刻し、宮崎安貞著『農業全書』（元禄十年刊行）（一六九七）と対比照合を行なうところの徳山敬猛著『農業子孫養育草』（文政九年）（一八二六）は、すでに世に紹介されている一農書である。国初より慶應三年までの間の日本人による著編撰訳の全書籍を誌す『国書総目録』には、「農業子孫養育草　のうぎょうしそんやしないぐさ　㊇徳山敬猛、㊍文政九年、㊇近世地方経済史料四」[1]とあるが、このように、すでに小野武夫編『近世地方経済史料』の第四巻に翻刻され、活字本となっていて、これによって本書を読むことができるようになっているのである。この書については、そこには、「文政九年丙戌六月、美作の人、徳山敬猛の著す所にして、農事の沿革概要より、麦の陽、稲の陰草なるを説き、夫より種芸、節気、分限、男女子の使用法、種籾の撰択、耕作方等を記したる有用の書なり。…原本は岡山県より農商務省に進達する所にして、美作国大庭郡徳山村徳山馬太郎の蔵書を借写せしものに係る。」[2]という解題がなされていて、「有用な農書」として紹介されている。また、最近の農書への関心のたかまりのなかで刊行された農書読書手引ともいうべき古島敏雄編著『農書の時代』においては、その地域別主要農書一覧に本書があげられ、「農事の沿革、麦の陽草、稲の陰草、種芸、分限、農具の選択、

飼牛、種籾の選択などの項目からなる。『農業全書』『農稼業事』に類似した点も少なくない。[3]」との解説がつけられているが、この一覧には選択基準があって、そのひとつに「他の農書からの引用の多いものや偽版もどきの書は省いた」ということがあって、この『農業子孫養育草』は『農業全書』等の類似はあっても、オリジナルな農書としての評価をうけているのである。

このように、『農業子孫養育草』はオリジナルの農書として評価されてきているのであり、その故に最近のわが国近世農書類の集成刊行の企画において本書がとりあげられることとなり、筆者がその翻刻、校注、解説等を担当することとなった。翻刻にとりかかったところ、本書には『農業全書』、しかもその自序、凡例、巻の一農事総論からのピック・アップの個所があまりにも多いことがあきらかとなった。前掲『農書の時代』にも、『農業全書』『農稼業事』に類似した点の少くないことが指摘されていたが、しかしそれは単なる類似にとどまらないのであって、オリジナルの農書という評価には大きな疑問をもつにいたった。このようなことから本書は先の農書集成刊行の企画から除外されるにいたったのであるが、しかしこの農書は、それが『農業全書』に酷似しているということと、本書の草稿ともいうべき『農業子孫養育草控』（文政七年）と本書とがこれまたその内容を著しく異にしている[5]ということによって、検討すべき問題を提起するものであると思われるのである。

その問題とは、第一に、この著書には『農業子孫養育草控』という、本書に先立つ二年前の文政七年の本書の草稿ともいうべきものがあるが、それと本書とはその内容が大きく異なっているということに由来するものである。草稿とは著しく異なる本書が成立する過程、それは草稿では全く言及されることのなかった『農業全書』――それは当代の最も権威のある農書であった――のピック・アップによって本書が成立する過程であるが、このような成立過程そのもののもつ問題である。知識の一定の、少くとも最少限ある程度の体系化を内容とす

(2)

(3)

る書物の成立をめぐる興味ある問題が提起されているといえるのである。第二は、できあがった本書は『農業全書』の酷似であり(そのほか同じく流布していた『農稼業事』との類似も指摘されているが、直接的な引用ではない)[6]、また『久世條教』(早川正紀著、寛政十一年(一七九九))[7]なる一地方書からのかなりの引用部分があって、オリジナリティはきわめて小さいが、それにもかかわらずそれらを除いたあとに、わずかではあるがそこに残る独自の叙述、あるいは、草稿と本書とはその内容を大きく異にするものではあるが、それにもかかわらずそこから読みとれる両者をつらぬく著者徳山敬猛の関心事に由来するものである。ここには、この時期のこの地方の農業生産の特質をめぐる重要な課題を知る手がかりが提示されているものと思われる。幸いにして、この徳山家の近世期を中心とした四千六百余点の文書類が残されていること[8]、この徳山家についての綿密な研究がなされてきていること[9]、そしてこの地方についてのすぐれた地域史研究の成果があること[10]、このような条件のもとに、右に設定した課題の追究を中心としたこの農書をめぐっての検討を行なっていきたい。本稿は、すでにここにその結論を述べたところの、この『農業子孫養育草』の翻刻と、それの『農業全書』との対比、ならびに若干の補註を行なうことを内容とするものである。

ところで、本書はすでに小野武夫による翻刻・活字本となっていることは右に述べたとおりであるが(以下小野翻刻本とする)、本稿では、すでに失われてしまった本書原本に最も近い位置にあるといえる初瀬川筆写本を底本としたあらたな翻刻を行なう。この事情について若干記そう。

前掲小野編『近世地方経済史料』第四巻の解題の如く、本書は農商務省に進達された。その後は、同書の自序によると[11]、農商務省によって蒐集された農書類は大正十二年の関東大震災に遭遇して灰燼に帰してしまうが、たまたま農商務省に勤務していた小野武夫は、大正九年から同十二年にいたる間に、同省文庫に保管されていた農書類のかなりの部分を謄写していたということである。同書に収録されたのは、この小野筆写本を底本と

したものである。昭和七年に同書は刊行されるが、そこで翻刻、活字本となった小野翻刻本の底本である小野筆写本はなくなってしまっている。ところで、本書原本はこのように関東大震災で焼失してしまうが、それ以前に福島県の初瀬川健増が農商務省にむいて本書を筆写しており、この写本が初瀬川文庫に残されている。[12] 本書原本はなく、また小野翻刻本の底本となった小野筆写本もない今日においては、この初瀬川筆写本が原本に最も近い位置にあるといえるのである。

註

(1) 『国書総目録』第六巻　一九六〇年　岩波書店　四六八ページ。
(2) 小野武夫編『近世地方経済史料』第四巻　一九三二年　同刊行会　四ページ。
(3) 古島敏雄編著『農書の時代』　一九八〇年　農山漁村文化協会　二五九ページ（佐藤常雄・編集部執筆）。
(4) 前掲（3）と同一書　二四八ページ（同前）。
(5) 徳山敬猛著『農業子孫養育草控』（文政七年）は岡山大学附属図書館所蔵の徳山家文書にある。本稿で指摘した両者の違いについては別稿において検討する予定である。
(6) 本書にある稲の雄穂雌穂の図説（一五五ページ）は、『農稼業事』（児島如水・徳重著、寛政五～文政元年）におけるそれに類似しているが（『日本農書全集』第七巻　一九八〇年　二九～三四ページ参照）、しかし本書の叙述のごとく、それからの直接的引用ではない。
(7) 小林久磨雄編『吉備文庫第五輯』　一九三〇年　山陽新報社　所収。『農業子孫養育草』の本文冒頭部分（本翻刻一七〇ページ一行の「抑農業ハ国家ノ大元ナリ」から一六八ページ三行の「皆勤慎ナリ」まで）は、この『久世條教』の二～七ページ勧農桑から養蚕に関する部分を除いた個所からの大巾の引用である。
(8) 岡山大学附属図書館に徳山家文書として所蔵。同文書の目録は『岡山大学所蔵近世庶民史料目録　第二巻』一九七三年。
(9) 宗森英之「村方地主制と鉄山経営―美作国大庭郡徳山家の場合―」『岡山史学』第六・七号　一九六〇年六月。
(10) 川上村史編纂委員会編『川上村史』一九八〇年。
(11) 前掲（2）小野編同史料第一巻　一～七ページ。
(12) 初瀬川文庫中の本書筆写本を底本とするにあたっては、中田謹介氏（社団法人農山漁村文化協会）の御厚意によった。初瀬川文庫は福島県会津若松市大戸の初瀬川昂家所蔵図書で、三代前健増氏のときに一般公開されている。なお、長谷川吉次「初瀬川文庫を整理して」『日本農書全集第二巻』の「月報」一九八〇年二月　参照。

(5)

翻刻にあたって

一　底本には、初瀬川健増筆写本（初瀬川家所蔵文書中の『随意録』第二十八に収録）を用いた。

一　底本の文体、仮名づかいは原本のままとした。ただし変体仮名はひら仮名に改めた。

一　底本の漢字は新字体に、異字については現在の字体とした。ただし、并、抔、ホはそのままとした。

一　漢文体の部分はそのままとし、返点のないものは（　）をつけて記入した。

一　句読点をつけ、清濁はそのままとした。

一　底本の誤記と思われるものは右側に（ママ）と入れ並記した。

一　底本で読解不能の文字は□で示した。ただし、小野翻刻本で補えるものは右側に（　）をつけ記入した。

一　明らかな脱字は右側に（脱〇〇）として同じく小野翻刻本によって補った。ただし長文の脱落の個所は同書によって補註において補った。

一　行間記入個所は〈　〉をつけ、本文に組み込んだ。またあきらかな重複個所は〔　〕をつけ、(ママ)とした。

『農業全書』との対比照合

一　これには『日本農業全書』（山田龍雄等編集、農山漁村文化協会）の第十一・十三巻所収の『農業全書』（翻刻、校注等山田龍雄ほか、一九七八年）を用いた。ページ数は第十二巻のそれを示す。

一　この『農業全書』にはふり仮名が附されているが、ここでは一切省略した。

農業子孫養育草

農業子孫養育草序

先大父本名清延翁は、子孫為相続、稚子遺教抄を著述し給ふ。予ハ彼書を熟読信用して、勤慎約の三ケ條を守り、漸く星霜を歴耳したかへる年の後、隠遁と成二階に独居して閑寂を楽ミ、倩思へらく我世渡り二千辛万労を尽せし事に思ひくらべ、子孫ハ安楽に暮らさせたい。明暮思惟して遺教抄を考ふれハ、第四巻目、経曰、三界無安、猶如火宅、衆苦充満、甚可怖畏と説示し給へり。三千世界安楽なる事ハなく、焼る家の内ニ座す如く、衆生の苦患世の中に充満して、諸国里々浦々島々山の奥迄此世界に住るもの一人も苦労患難なきものハなし。甚た恐るべしとの御示しなり。如斯此世に生るゝ者、皆々苦労のなきものハなし。其中ニも人ハ万物の長として鳥獣虫魚に較らふれハ其苦軽くして楽ミ多し。仏も三界無安と説給へハ苦ハ世界に充満して遁るゝ道なし、迚も可遁様なきからハ早く覚悟して苦労ハ世並人並の事と兼て諦め其覚悟さへよけれハ、苦労も苦とならす誠に苦ハ楽の種といふ事至て金言なり。諺ニも若き時の苦労ハ買てもせよと、目前の道理なり。爰を以て其覚悟の仕様を考へ世の中を観るに、農工商の三民千変万化の世渡なれ共、商家抔ニて一旦繁昌するといへ共三代と相続せし例し少し。

『農業全書』

(6)

寧農業の外安気にくらし子孫長久の秘伝ハなし。農家に於てハ数代相続の者多し。此訳を子孫ニ教訓せはやと思へ共、口に述る教へハ当座のミニて後日の功なし。亦遺訓抄(ママ)ニ正意誠心修身に至る迄詳に千言万語を述へ給へハ、今更我ホ事を何云ふへくもなし。されと遺教抄にも農業に限りたる遺訓ハなし。去に依て当家先祖より代々相続の農法（数代なれハ略し、只今存生の敬寛中にも農功あり。田地開発の成功を子孫に伝ん為メ、石塔に鍬を持し老人の姿を切付たり。此心を感すべし）を無惰怠(ニ)いとなミ勤なハ幾代も相続すべしと、日頃の工夫に四寸の胸中をいたミ、愚者も千慮すれハ一徳有といへる語にもとつき、千慮ハをろか万々慮を尽しても無知短才の老悖よき分別も出ぬ。折ふし過る頃農業全書を粗見侍り、且つ久世條教の旨を伺ひ、近郷老農百姓の上手の説を聞、功あるを取ましへ、予か尺寸の試覚あるを加へ、此土地に応すへき要を拾ひ、農業子孫養育草と号て子孫に授与す。しかはあれと、吾本より無学なれハ著作の才なく只魯魚の誤多からん。将た文調を飾る事能はす。仮名ハいゐひ、ゑへ、うふ、やうよう、をお、の違ひ多かるべし。かなつかひも知らされ共、此書ハ偏に農家の為に用る事なれハ、文盲の耳目に通し安からしめんと、此辺通用の俗語に写せり。

…我愚蒙を忘れて、種植の書をあらハして、民と共に是によらん事をおもひ、唐の農書を考へ、本邦の土宜にしたがひ、農功の助となるへき事を撰び、或は畿内諸国に遊観し、広く老圃老農に詢謀、草稿を集めて十巻とし、農業全書と名付侍へる。されど本より著作の才なければ、たゞ魯魚の誤り鄙俚の言多きのミかハ、其義理も亦歯莽にして疎謬多からん事を恐る。（二一ページ）

(7)

○愚老ハ子孫を憐ミ農術において当地上宜ニ随ひ、万か一の助とならん事を思ひ、管見の及所を書綴れハ、或人是は楽隠居のよを慰といへり。全く左ニ非す。なくさミなれハ目に及ひたる仮名本、軍書ホ、又ハ当座の戯に言捨し口癖の狂歌、をこかましき咄の類ハ、人か笑ふと誹ふとまゝのかわ、我心たに面白けれハ夫か気晴し保養共云フべし。仮初にも末の世に残し子孫を稼穡に導き、家相続の便にもなれかしと、愚意を労する事疎ならす。是に付ても遺教抄の大部に数年肺肝を砕き、序跋に子孫を厚く戒め置れし先大父の心中を思ひ廻せは、有りかた泪かこほるゝ也。此書ハ遺教抄に比ふれハ著作の心労十分の一にもあらす。然とも分相応の風か吹とて、太鼓ハ太鼓の声、尺八ハ尺八の声なれバ、予か分際にて子孫を恵む慈悲に迷ひ心意を労せし志を推察し、又先祖より代々農事の成功高恩の余沢に依テ只今の子孫足る事を知らハ、衣食住の不足ハなし。常々此恩儀を不忘有難く思ひ、益々農業を

一吾本より文才なくして文詞を飾る事あたハず、且此書ハひとへに農家の用る所なれば、あながちに文辞を華麗にすべきにあらず。楽軒翁も又其辞を野にして、衆民のさとしやすからん事を思ひ、皆俗語にうつせり。（二六ページ）

一後来文才余り有て、且農事に熟したる人

励ミ工夫を篤くし其勤ニ精力を尽し修練会得せは、農に熟し中にハ文才の者もあらん、亦世ハ億兆の農家なれハ必大功の智者有べし。是ホに尋ね問ひ猶此書を増補し子孫の益たらん事を希ひなハ、自然と天道神明の冥慮も叶ひ祈らされ共福ひは来らん。嗚乎、大哉。農の徳を称し、家業大明神先祖大菩薩を尊ミ敬ひ信仰すれハ、御利生ありて万代不易農業子孫養草ハ五風十雨の恵にて、四方にはびこり栄立々(ママ)して時を違へず、安くあら気を泰平の御代に生れぬる有難さには、子孫永々萬つ代の春をむかへよかしと、謹て序す。

文政九年水無月の陽日なり。

徳山　敬猛

行年六十五歳書之

此書の発端に六十を暦て思ひ立しと云たるハ子孫の恩愛に迷ひ安楽にくらさせたく思ふと興を入しなり。本より農事を一大事と思ふ故に、養父当戌八十四歳敬寛還暦の賀に、農絵の盃を調へ、其箱に先祖より農業を励ミ数代相続の成功を書付たり。後来其志を考へ農法怠る事なかれ。

世の中に子を愛せぬ親ハなし。諺ニも子ゆへの闇といへり。

中納言　兼輔

人の親の心はやミニあらねとも子を思ふ道に迷ひぬる哉

(9)

あらバ、猶此書を増補し、弥民の益たらん事、予が微賤に在て、世を患ひ農をめぐむの素意にして、尤希ふ所なり。

(三〇ページ)

抑農業ハ国家の大本なり。上天子より下庶人に至るまで、生を養育する五穀を作り出して納るものなれ共、是天下の宝といふものなり。故に古へ聖賢の政事にも耕作を根元としたまふといへり。神代の昔天照太神(ママ)御田作の事を執行ハせ給ひ、亦御ミつから神衣を織給ふ。歌にも、　徒に世になすさミそはたとのに神さへミそをおるときくにも　又人代の始つかた本朝中興神君神功皇后武内の臣に勅し、土地をひらき神田を作らしめ給へり。諸越ニも天子自藉田を耕たまひ（民の力をかりて耕を藉田と云）、王ハ一撥、公ハ三撥、郷ハ九撥、太夫ハ二十七撥、庶人ハ千畝を終とかや（周礼一撥ハ、冬田を王自耒を持一度起返させ給ふ、終とハ何れも推撥の数終りて其跡を百姓請取作る也。尽く上天子より農を学ひ給ひ、明堂に九室あるも井田の制を以為之(レ)となり）。故に漢の文帝先王の法にしたかひ、自ら天下の農夫に先立ちて作り給る物を以て天地神明の粢盛に供給ふ。我朝人皇十代　崇神天皇の十二年九月、始校人民更ニ科調役と有。又三十四代推古天皇二年春二月聖徳太子奏聞ありて国々へ勅使を下され、百姓に蒔仕付の時節土地相応する物并作りたて様を教させ給ふ。三十七代孝徳天皇記ニ町段の数租庸の事詔有て、四十八代称徳天皇の御宇大臣吉備公勅宣を奉し、天下の百姓に大小の麦を植させられたり。去れと蒔植の時を失ひ稔りよからす、茲に於て五十二代嵯峨天皇の御宇弘仁十一年藤原冬嗣公勅を請

(10)

ケて播種の時後れさる様を告示させ給ふ。是より耕作の令制頻りに行ハれ、山沢原野開らけ荒亡の地なく震巽坎艮坤の八の卦をなし、一切萬物の理是に漏るゝ事なし。今其理を以て考ふるに稲麦陰陽の物農の根本なるを以て生熟の時右の如く卦爻に於て有難き事なれ共、農家其所以を知らす、只占法の事のミ覚へ陰陽消長の理を明らかにし、耕作の道も此理ニかないたる事を弁へさるにより、麦畑生ヒ立治るの時を卦爻に表して農業の大切なる事を知らしむる也。麦の刈旬赤らむ事根元より色付て穂ハ後に赤らむ也。是ハ陽気上るに随ひ稈根本より熟る也。稲の色付事ハ穂より赤らミ、葉ハ次に黄はミ、藁ハ後に熟る。是ハ八九月ニなれハ陰気盛にして冷なる気を請ケるにより穂より赤らむ。右陰陽の理を能々考ふべき也。凡五穀其外万の野菜に至る迄天地人三歳の力をへて盛熟する也。周天の数三百六十五度四分度の一にて、日輪は昼ハ上をめくり夜ハ地下を回りて健々として無息ム時、地是ニ随ひ五行の気内に回りて少も不息して萬物生育する也。然るに天地と徳を一にする人として其業を励さらんや、五穀の種をうくるハ人なり、生育するハ天地の生々也。然共種を下ろす斗りニて人耕耘肥しせされハ不熟する也。天地の徳と人の力と合はざれハ出来ぬなり。天地の生々ハ一時も絶ゆる間なし。人不勤故に不熟多し。人ハ子の刻より寅の刻迄臥休むものなれバ、何程働ても天地にハ及バぬ也。去れハ此道理

を能々合点して怠りなく勤べし。さすれハ天地の恵ニて水損ある年も旱損ある年ニても、人の田よりハ我田ハ能熟して取り入る也。此理ハ農に限らす万事に心得あるべし。皆勤慎なり。

一農業全書ハ元祿の昔筑前宮崎安貞翁、四十余年農民を友として自ら心力を尽し手足を労して農事を営ミ播種の道に委しく、又貝原篤信先生も農事法審なれハ、此二先生唐の農書を考へ本邦の土宜に従ひ、農功の助となるへき事を撰ミ編集して世に著し給ふ。古より本朝の賢君農業を尊ひ給ひ、前條ニ述る如く神代より連綿として農事盛んなりと雖も、農術を教る書ハ世に伝らす。されハ耕夫皆農法を委しく知らずして稼穡の道明らかならさる故ニ、身を労し心を苦しめて勤といへ共、秋の稔り不足をミる事屢々也けれハ、是を歎く思ひ農業全書を編して万民を恵ミ給ふハ本邦農書の権輿万世不朽の御厚恩也。

一凡昔へ聖人の政ハ、専ら教養の二つに出てす。農業の術ハ人を養ふ本なれハ、農法委しからされハ五穀少くして人民生養をとくる事な

…古本朝の賢君、多くハ農業を重くし給ふといへども、農術を教るの書ハ世に伝ハらず。故に農法世に委しからず。（一七ページ）

…然るゆへに、身を労し心を苦しめて、勤めいとなむといへ共、効を得る事すくなくして、やゝもすれば、秋のなりはひの不足をみることしバ〳〵なり。…唯ひとへに民皆農術をしらずして、稼穡の道明らかならざるゆへなり。（一八ページ）

…凡いにしへ聖人の政ハ、専教養の二つに出ず。農業の術ハ人を養ふの本也。農術く

(12)

し。孝弟の道ハ人を教るの本也。人も教なけれハ人輪(ママ)明らかならすして禽獣に近し。故に古への聖賢天下国家を治る二必農を奨め稼穡を教るを以て先とし、人の道を正すを以て給ハ(本とし脱カ)ざるハなし。然る二日本の地ハ南北の中央二当れるにや、陰陽の気正しく寒暑も中和に叶ひ、甚しき天災地禍もなく、平地多くして稲麦を種るの地広く、国土勝れて肥良なれは、万つ種植の類成長せさるハなし。高麗唐土にもかかる上国ハなきとそ聞え侍る〈我等壮年の頃思へて此山中にて農事を営、〈いかに精力を尽すといへ共立身ハ成〉かたしとふと迷ひしか、四十年頃より本心に立かへり、能々思へハ、此谷筋ハ至て暮しよき所なり。別て当村ハ農事第一の肥料沢山二て竹木有、水旱の難稀也。冥加至極難有事と子孫に可致教示事也)。然る二今泰平の御代にしあれハ、万民安堵し親兄弟妻子相供二目出度寿を保ち、農事を励、種植の道を能弁へ無怠勤る時ハ農術世々二熟し五穀よく稔り、衣食の養ひ足りて各相続せば自ら貪る心もなく、風俗すなほに和順し、国富民栄へ貴賤等く代々安楽ならん事疑あるべからす。

(13)

ハしからざれバ、五穀すくなくして、人民生養をとぐる事なし。孝弟の道ハ人を教ゆるの本なり。孝弟の教へなけれバ、人倫明かならず、人の道立ずして禽獣に近し。…しかりしより以来代々の聖王賢君、天下国家を治るに、必農をすゝめ、稼穡を教るを以て先とし、人倫の道を正すを以て、本とし給ハざるハなし。

(一六〜一七ページ)

抑日本の地ハ、南北の中央に当れるにや、陰陽の気正しく、寒暑も中和にかなひ、甚しき天災地禍もなく、平原多くして、稲麦を種ふるの地ひろし。国土又勝れて肥良なれば、万づ種植の類、物として成長せざるハなし。もろこしの外にかゝる上国ハなきとぞ聞え侍る。

(一九ページ)

…故に先よく農術をしりて後農功を勤むべし。且恒の産なければ、恒の心なし。衣食たりて後、礼儀行ハるゝ理なれば、民種植の道をよくしりて五穀ゆたかに、衣食の養

一此書を読ミ其大概を知るといふ共、日々農事を専らに心を尽し力を用て実に其理を執行し、修練会得せざれハ無益の徒事なり（譬へハ遺教抄の発端に著述せられし如く、書物ハ読むへきの志によりて益不益異なる有、読て徳を得さるハ其書の失に非す、読人の心掛悪しき也。諺にも論語を読ミ論語知らすと云へり）。此書も度々よミ記誦する人あり共、其身にハ勤め疎にして能呑込た顔つきニて、より〳〵の口遊一座の物かたり抔にしてハ更ニ益なし。農業の道に於てハ幼少より真実に心掛思ひを深くし、九夏三伏の炎天をも不厭、冬の雪吹も苦にせす、昼夜油断なく勤て農功を得る時ハ老て後安楽なり。都て農人は皆平生営む業にて世並人並の家業なれハ、彼放下幻術の奇妙或ハ軽業の綱渡抔、熟して奇異の巧をなして人の目を驚する類ひよりは、其効を得る事甚以て容易かるべし。

ひたりて、各其所を得バ、をのづから貪る心もなく、礼義廉恥行ハれ、風俗すなほに、人心和順し、一世安楽ならん事、日々に新に、月々にさかんなるへし。

（一九ページ）

一農家此書をよミ其大概をしるといふとも、日々にいとなむ農事について、心を尽し力を用て、実に其理を事の上に執行し、勤めて修練会得せずハ、唯是無益の徒事なるべし。たとへバ儒書をまなんで、四書小学に熟し、其余の経書にも粗通じ、字義、訓詁を諳じ、且講説ことに詳なりといへども、…却て文盲の人のごとし。此書も又是に同じ。たび〳〵これを弄び手馴記誦する人ありとも、従に此事を以て、より〳〵の口遊、一座の話談として、農業の上におゐてハ、真実に心を励ミ思ひを覃し、力を用ひてこれを心ミ営ミ、三たび臂を折の労なくしてハ、大に験を

(14)

一凡種芸の事ハ四季八節二十四節を考て（四季ハ春夏秋冬、八節ハ立春、春分、立夏、夏分、立秋、秋分、立冬、冬至也）其時日に後れず、時々に耕種るを肝要とする也。四季ニ節を用て月にハ障るへからす。喩ハ歳の内の立春なれハ其節を追て朦月に春の日数を積りて耕を始る也。地の利と人の功とハよく調るといへ共、天の時に合ざれハ苦労空しくして益少し。尤南北の違ひ山川の勢ひにより寒暖の替り有て、其所々のよき時節仕覚（レ）、草木の芽立日当もある事なれハ一偏に定めかたし。去れ共大抵定りたる中分の法を立て、時を見合年々の心覚して植蒔すべし。四時各其勤有。時節ニ格別先立て植れハ早過て生せす、又時節ニ後れて種れハ晩くして稔り悪し。物に

(15)

得る事かたかるべし。農民殊にこゝにおゐて、心をとゞめ力を尽すべし。しかハあれど、是皆平生、農家のいとなむわざにして、よの常の事なれば、彼放下幻術の雑事、これを習ふ事久して後其事熟し、奇異の巧をなして、人の目を驚す類よりハ、其効を得る事甚以てたやすかるべし。

（二九～三〇ページ）

…凡種芸の事にハ、四季、八節、二十四節を考て（四季ハ春夏秋冬、八節ハ、立春、春分、立夏、夏至、立秋、秋分、立冬、冬至也）其時日にをくれず時分〳〵に耕し種るを肝要とするなり。四季八節を用て、月にハかゝハるべからず。喩バ歳の内の立春なれバ其節を追て、朧月に春の耕しを始るがごとし。地の利と人の功とハよく調るといへども、天の時に合ざれバ、苦労空しくして益すくなし。尤南北の違ひ、山川の勢により、寒暖のかハり有

よりて時節少しの違ひニて稔り甚少き事なれハ、能々考へはかるべし。大方早きに理有。

一五穀其外草の類ハ大かた節気ニ先達て生る物なる故、少し早きかよし。若又斗らざる障り有て時にも後る事あらハ、よき糞して取分陽気のよき物を下に多く敷て種れハ、則其肥し植物の陽気を助る故に早く生成し、大かた稔りよき物なり。萬物其時下々の気を得て発生する故、夫々の物生る時下をよく計りて己に生せんとする時種く、己に生する時糞し培ひ、段々手入を用れハ、天地の生理によく叶ふゆへ豊年にハ云に及ず、少し凶作にても難ンくせ少く、災を遁れて、其所々のよき時節ある事なれバ、一偏に定めがたし。されども太抵定りたる中分の法を立をきて、其所の草木発生の時を見合せ、年々の心覚してうへ蒔べし。四時各其つとめあり。十二ケ月をの〳〵宜しきあり。時節に先立てうゆれバ早過て生ぜず。又時節にをくれて種れバ晩くして実のりうすし。物によりて、時節少の違ひにて、其実のり甚少き事なれバ、能々考はかるべし。智者ありといへども、冬うへて春収る事ハならざるものなり。　（七九～八〇ページ）

○又五穀其外草の類ハ、大かた節気に先立て生ずる物なるゆへ、少早まきでハよし。をそきに損多し。若又はからざるさハり有て、やむ事を得ずして、時にをくるゝ事あらバ、よき糞しの取分陽気のつよき物を下に多くしきてうゆれバ、則其こやし、うへ物の陽気を助るゆへ、早く生長し、少し時

秋の稔り空敷事ハなきもの也。

一惣て蒔物ハ午の刻前宜し。蒔たる土の其日乾くをよしとす。昼より前ハ陽気も盛んなれハなり。

一菜類稗荏子抔の苗を外へ移し植る物ハ午の後よし。其故ハ植て後日かけ和らきて痛ます、頓て夜気を得て夜の間にも生付もの也。取

(17)

にをくれても、大かたのミのりハするものなり。

(八〇ページ)

○又万の物其時分〳〵の気を得て発生するゆへ、それ〳〵の物の生ずる時分をよくはかりて、已に生ぜんとする時うへ、已にさかへんとする時、糞し培ひ、段々次第、時によって手入を用れバ、天地の生理によくかなふゆへ、豊年にハ云に及ハず、少々の凶年にても、万の難くせすくなく、災をのがれて、秋のミのり空しきことハなきものなり。

(八〇~八一ページ)

…一日の内といへども蒔物ハ午の前宜し。蒔たる土の其日かハくをよしとす。昼より前ハ陽気もさかんなれバなり。

(八一ページ)

○又菜などの苗を仕立をき、時至りて移しうゆる物ハ、午の後よし。其ゆへハ、うへ

分曇たる日雨を待てハ猶々よし。物ニよりて月かしらに種る物多し。是に陰陽の道かけ一日一時の違に目にはさやかに見へね共、皆以盛衰ある事莫大なれハ、種蒔ものは片時も早く油断せす、又刈収る物ハ少し遅くよく実のるを待て刈取べし。但し蕎麦烟草粟抔の類ハ少し早きもよし。年中辛労して作り、一夜の風雨霜嵐に損毛する事計りかたし、是則十分なれハこほるゝ道理を兼て心得べし。

一前条にも述る如く農人ハ常に暦を見て土用八専節かわりを考へ風雨ホの変あらん事を心におくへし。必節の替りニハ晴天もミる内に替る事有ものなれハ、朝夕其心得手配をよくして、彼節替りの妨をも遁るゝ覚悟すべし。

て後日かげ和らぎて痛まず。頓て又夜気を得て、夜の間にも生付ものなり。取分雨気曇りたる日猶よし。蒔物ハ晴日よし。又物によりて、月半より前、月の初めに種る物多し。寔に陰陽のみちかけ、一日一時の違にて、目にハさやかに見えねども、皆以て盛衰あること、莫大なれバ、種蒔物ハ片時も早く由断せず、又刈取る物ハ、少し遅くよく実るを待得て刈とるべし。但物によりて、大風霖雨の見合、是又肝要也。

（八一～八二ページ）

○又農人ハつねに暦を見て、土用八専、其外節気のかハりを考へ、風雨等の変あらんことを心にかくべし。必気のかハりには、晴天も見る中にかハる物なれバ、朝夕つとめの品手くバりを、閨の中にてよくおもんバかり、彼節がハりの妨をものがるゝ覚悟兼てすべし。

（八二ページ）

一惣て事を前に定る工夫ハ農事に限らね共、農人ハ取別ケ心を用ゆべし。天気の考へを疎ニしぬれハ一時の風雨に数月の苦労を空しくする事間々多し。必油断すべからす。物こと進むハ陽也、後ハ陰也。農業も軍事に代る事なし。すゝまざれハ勝利少し。日月の草木国土を照らし給ひ、瞬時もたゆミなき理也。是を目当として寸陰も怠るへからす、殊に耕作種芸の事ハ直に天道の福を祈る事なれハ、心ゆるミ怠りて朝も日にをくれて起き、大切至極の光陰を弁へす、今日の又なき（遺教抄に古人一日を過す事千金より重しと）事をハ打忘て農業を油断勝に勤めぬれハ、譬ハ一日に一時つゝ不足しても一年にハ三百六拾時也、合て見れハ六十日の違ひになる、三ケ年如斯怠れハ半年の働不足と成る也（又是を一時つゝ励て勤る時ハ三ケ年にハ一ケ年の余慶となる、如此出精すれハ家富栄へ子孫相続疑なし）。是を年々積れハ困窮の基、天道の恵にもれ、いつとなく田畑も瘠荒終には家内眷属より散々になる類世間に多し。然ハ心あらん農民ハ必後の憂を思ひて、天の時に随ひ一寸の光陰をも大切におしミて農業を大切に勤怠る事なかれ。

(19)

○抑事を前に定る工夫ハ、農事にハ限らねども、農人ハ取分心を用ゆべし。天気の考へを疎かにしぬれば、一時の風雨により、数月の苦労を忽に空しくすること間多し。かならず由断すべからず。物ごと進は陽なり。後ハ陰なり。農業も軍事にかハることなし。すゝまざれバ勝利少し。日月の天にめぐりて、瞬する間も滞たゆミなき理りを目当として、寸陰も怠るべからず。殊に耕作種芸の事ハ、直に天道の福を専いのる事なれバ、怠懶して、朝も日にをくれて起、大切至極なる光陰をわきまへず、今日の日の又なき理りをバうちわすれて、偏に怠りがちに、不浄なる気立にて、農業をいとなめバ、其心違へるを以て、天道のめぐミにもれ、いつとなく、田畠も瘠あれ、年をへ、月をかさね、災いやまし、飢寒のうれへにせまり、後々ハ父子夫婦もはなれ〳〵になり、終に人づかれハれの身とおちぶれ、貧苦のかなしミやむ時なし。然れバ心あら

一耕作ハ天地の恵にてそたつもの故年中陰陽の考へ第一なり。夫陰陽の理りハ至て深しと雖も、耕作ニ用る所ハ其心を付ぬれハ悟り安し。農人是を知らすんハ有べからす。其利を能弁へて耕作を勤れハ利潤多し。先昼ハ陽、夜ハ陰也。火ハ陽、水ハ陰、土の乾たるハ陽、湿りたるハ陰、ねはりかたまりたるも陰、脆くさハやかなるハ陽、軽くして（ママ）過きたる浮泥の類ハ陰也。重く強くはたくるハ陽也。此等の類を考へ土地の心を知るべし。仮初にも陰気の陽気に勝さる様ニ分別して陽と陰と順によく調ふ計を専とすべし。

此段陰気の陽気に勝さる様に分別せよと有。譬ハ天地の陰陽に順なれハ世中に殃あり、人の陰陽不順なれハ身に病あり、又朝寝して遅く起れハ其身の陰気勝て陽気を塞く故、年月を積り忽病生し、家業怠り家を滅す也。又男に差図女と女の差図を請る男ハ陰陽逆する故ニ終ニは家を滅す事古今其ためし少なからす。孔子も女子ん農民ハ、必後のうれへを思ひて、あらかじめ、ふせぐべし。天の時にしたがひ、一寸の光陰をも大切におしみて、農業に身を投ち、心を用ること慎でおこたる事なかれ。

（八二～八四ページ）

…夫陰陽の理りハ至て深しといへども、耕作に用ゆる所ハ、其心を付ぬればさとりやすし。農人これをしらずハあるべからず。其理りをわきまへずして耕作をつとむるハ、多くの苦労をなすといへども、利潤を得る事少なし。先土のしめりたるハ陰なり。乾きたるハ陽なり。ねバりかたまりたるハ陰なり。脆く、さハやかなるハ陽なり。かるくして柔か過たる浮泥の類ハ陰なり。重く強くはら、ぐ類は陽なり。此等の類ををしはかりて、土地の心をしるべし。仮初にも陰気の陽気に勝ざるやうに分別し、陰陽のよく調る計を専とすべし。

（四八～四九ページ）

(20)

と小人とハ養ひかたしと宣ふ。

一耕作にハ多くの心得あり。先我身の分限を能斗りて田畑を作るべし。各其分際より内はなるを良とす。其分に過るを甚悪しゝとす。此故に家内の人数を計りて田畑を少内輪に作るべし。さすれは心の侭に耕耘する事故ニ、能稔て取収めよきもの也。又分外に多く作る時ハ手回し成兼あくミ仕事手後れ思ひの外取収て物成あしき者也。第一家内の働による事なれハ、家族ハ云に及す下男女迄情をかけ賞罪を正し、仕事の出来よき時ハ誉、又出来の悪しき日も非は扨今日ハ仕事の出来少しよろしからね共、箇様の時ハ何ぞ差支心遺ひ抔あり、却て皆々精力を尽し嘸草臥いらんとなぐり置可申(レ)(此段かくへつ仕方悪く心得かたき事もあらば、其日の人数書留置、人の善悪を考へ、其中ニて実意成ものを改、追テ内々聞糺時ハ善悪虚実分明に知る事も有、其上にて人の遣ひ様有。然共主人たる者ハ日々夜々心を付作場へ赴き、召遣の者へ下知をなすべし。内に斗り居てハ仕事の進退知れるものニ非す、代々下人共ニ農事を勤可申(レ)肝要也。是天理にも叶ふて順也。萬事順成れハ則ち福有、逆成ハ則ち禍有と思ふべし)。又折々ハ下男女にも魚肉なと与へ浮世の物語抔して興し、扨其方共も只今手前か仕事を出精してくれると云ふものゝ、給金賃銭

〔21〕

…抑耕作にハ多くの心得あり、先農人たるものハ、我身上の分限をよくはかりて田畠を作るべし。各其分限より内バなるを以てよしとし、其分に過るを以て甚あしゝとす。

(四七～四八ページ)

…多少下人をつかふものハ、心をねんごろに用ひて、仁愛を専とし、正直信実を本とし、善悪をわかち、賞罰を正しくして、己を和悦に心よくして人をつかへバ、下人も又、心いさミ苦労をわすれてつとむるゆへ、其仕事のはかゆくのミならず、五穀等の生成も自ら滞らず、よく長じよく実のるものなり。

(四九～五〇ページ)

を取るからハ則我身の仕事をすると心得、常々正直信実に無間断(二)勤れハ必天の御恵有て後々福来るといふ事を念頭に教れハ、皆々勇ミて辛労をもこらい、陰表なく働く故仕事はか行自ら五穀能成長する様になるもの也。遺教抄第二巻に一年の計ハ春耕にあり、春耕されハ秋の功なし、一日の計ハ鶏明ニあり、是を能々考へ明日の業ハ前夜より工夫を定め暁方起て天気の晴雨を能見定手配すべし。前条に述る如く一日に一時つゝと雖も増と減との違にてハ莫太(ママ)の損益なれハ、一日に一時つゝ働き出す事を家風とすれハ、塵積て山となる理合ニて天地の道に合ふ故ニ、是ニ過きたる祈祷もなく、諺ニかせぐに追付貧乏なしといふ如く、自ら耕作よく稔其年の暮豊にして又来る年も如(ト)斯、仕馴仕来家法と成、次第に家栄へ子孫長久なるべし。然則先祖へ孝となり子孫へハ慈愛となり、其身も安楽にて年寄程富貴に成、家督ハ子に譲り楽隠居の楽しミ此上あるべからす。

一百姓ハ農具を撰ミて遣ふべし。農人精力を尽すと雖も農具悪しけれハ仕事のしるしなきもの也。少しの費を厭はす鉄抔良きを調へ用ゆれハ、思の外仕事のはかゆきて益多し。鎌ハ猶以よきを遣ふべし。其鎌一年稲麦を刈て翌年山草を刈る様に年々心掛てよし。

又古語にもいへるごとく、一年の計ハ春の耕にあり、一日の計は鶏鳴にある事なれば、未明より起て早朝陽気につれて、田畠に出て動くべし。又明る日の仕事を則前夜より考へ定めおき、暁方おきて天気の晴雨をよく見ハかりて、猶其日の手くバりを定むべし。

（五〇ページ）

○惣じて農具をゑらび、それ〳〵の土地に随て宜きを用ゆべし。　（六七ページ）

…農具の類あしけれバ、農人精力を尽すといへども、仕事のしるしハなき物なり。必少のついへをいとハずして、かねよき農具を

一農業ハ牛（悪症の牛又高値の牛求へからす、中位かよし）の良悪ニて益不益有、又牛の飼様甚大事也。其家内主たる者ハ大家小家共牛を大切にすべし。下人任せニすべからす。先此辺にてハ山野の草ハ申に及す、年中の糠類、藁、大小豆のから、稗粟のから切拵ぬ、糠へ交りけん縄手草ハ牛の喰ぬ草類や悪しき草を除きて干、又麦刈の時を考へ、扨水の飼様朝夕四季のかげん有（夏土用中ハ（ママ）水呑てよし）白水棚下の洗水ホ猶以て冬春の飼料別して大事也。春の牛やせたる家ハ必身上あしき者也。

牛ハ其家の妻女たる者飼様心掛べし、男たる者ハ外とへ出る者故行届ぬ事有。

一田畠ハ年々に替へ、地を休て作るを良とす。然共地余計無てハ替ゆる事ならすハ、植ものを替て作るべし。毎年一種を作るべからす。所により水田抔一年休め又ハ畠となし作れハ土の気転して盛んに也、

(23)

用意し、思ひのまゝにはたらくべし。しかる時ハいとなむわざ心よくして、覚えずしらず、はか行て、土地の心もをのづからよくなる物なり。

（五一ページ）

…又田畠ハ年々にかへ、地をやすめて作るをよしとす。しかれども地の余計なくて、かゆる事のならざるハ、うゑ物をかへて作

虫気もなく稔一倍も有物とかや。此辺ニて烟草地の跡稲の能出来る理りなるべし。凡土ハ転し替れハ陽気多く、執滞すれハ陰気多しと心得べし。晴たる日に耕し其土白く干たる時搔碎きてよし、耕植共に陰陽を調て天地の徳を助くべし。

一種子物ハ五穀ニ限らす種を撰ふ事肝要也。是生物の根元則生理其中に有事なれハ慎て大切にすへき事也。作物過もせす能程に出来て虫気の痛もなく、色よくうるハしきを常の刈時より猶よく熟して刈取稲ハ雌穂を見分て撰り取るべし。左の図を見て考ふべし。

古今原始ニ云ク、炎帝神農氏始メテ擇五穀種教民作耒耜以耕稼、此力農之始メナリ云々。又日本書紀神代巻曰

るへし。所により水田を一、二年も畠となし作れバ、土の気、転じてさかんになり、草生ぜず虫気もなく、実のり一倍もある物なり。（四八ページ）

…さて畠物にて土気よハりたる時、又本の水田となし稲をつくれバ、是又一、二年も土地転じて、大利をうるものなり。…凡土ハ転じかゆれバ陽気多く、又執滞すれバ陰気おほし。（四八ページ）

…晴たる日に耕し、其土白く干たる時かきくだき、…。農人よく此理りを弁へ、凡耕しうゆる事ごとに、皆陰陽を調て、天地の徳をたすくべし。（四九ページ）

五穀にかぎらず、万づの物、たねをゑらぶ事肝要なり。是生物の根源にて、則生理其中にある事なれバ、慎て大切にすべきことなり。作り物の過もせず、よき程に出来て、虫気の痛もなく、色よくうるハしきを、常のかりしほより猶よく熟して刈取、雌穂を見

天照大神喜之曰、是物ハ則チ顕見蒼生可食而話之也。乃以粟稗麦、為陸田種子、以稲為水田種子。又因定天邑今地頭庄屋即以稲種始テ植干天狭田及長田、其秋垂穎八握莫々、然モ甚快ナリトアリ。

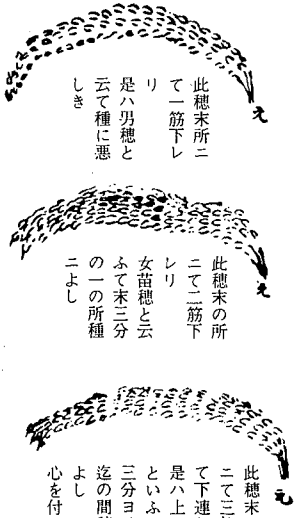
分てゑりとるべし。

（六九ページ）

男苗穂

右に述ル如く稲種を取ルニハ、中分ハ能く稔麗しきを見立、其田を幾度も改、交り稲枯穂稗抔を悉く取り、其後よく熟して刈、別に干て扱、其稲ならハそろ〳〵打よくひまひをして俵に入置へし。

種籾撰方図



右ハ苗代種籾の撰方ニて取実多少あり、此事越中国新川郡何某試しに、藁一束に凡籾五合程つゝ余分有。されハ田壱反ニ付益則壱

斗五升と見へる。一国ニてハ莫大の益也。扨又同国蛎波郡何某種籾を撰し時、穂の目方を試しに、女苗穂ハ男苗穂より二十穂ニて凡八匁つゝ余計有事也とそ、如斯益あるに違なきよし。加州金沢松村氏より聞けり。因て農家へ是を伝ふ。

文化十四丁丑年四月　　濃州大垣深造舎トアリ

右ハ文政四辛己正月勝山松毬庵予か耕作を大切に心掛る事を察して写し送り給ふ。是則天の与へと感入、同年の秋より少しつゝ女苗穂を撰けるか弥ニ取実よし。又文政七酉年七月伯州大庄屋足羽氏より板行にして方々へ配はられけるを白髪国蔵立帰り引合候所右同文言なり。依て種積帳ニも書入置く也。

一粟稗の類ハ其畠ニて穂太く色よきを抜穂にしてつり置べし。

…又粟黍などの類ハ、其畠にてよく秀て色よきをゑらび、ぬき穂にしてつり置へし。

（六九ページ）

一大豆小豆の類は、粒揃て色つやよきを種とすべし。

一物種を置所ハ土蔵をよしとす。湿気にふれざる様注意すべし。

…物だねをおさめ置所ハ、土蔵をよしとす。

（六九～七〇ページ）

一惣而物種ハ能々吟味して少し損したるを蒔べからず。痛たる種ハ一段生し栄へる様なれ共、終にハかしけて枯るゝ也。

一雑りたる種を蒔へからす。春て多く減ても精らけに成かたし。飯に炊てハむらにへして味ニ迄悪しく、一切種の撰ひ悪しけれハ色々の損多し。疎にすべからす。惣て物種ハ能く干して貯ふべし。

一稲に赤米其外色の悪しき米の雑る抔ハ其種の撰悪しき故也。少の手間にて過分の徳用となる事なれハ、作人たるもの能心得、種を撰べし。

(27)

○又物だねをゑらぶ事、…能吟味して、少も損じたるをハ必うゆるべからず。少にても痛たるたねハ、一旦生じ栄るやうなれども、終にかじけて死る物なり。

(七〇ページ)

…尤雑りたるたねをうゆべからず。春て多く減てもしらげになりがたし。糶にハまじりありて、見つきあしく、飯に炊てはむらにゑして、味までよからず。物ごとたねのゑらびあしけれバ、色々の損多し。懇にゑらぶべし。

(七〇ページ)

○又五穀の種をよく干あげ、…虫の付事なきものなり。

(七〇～七一ページ)

○又稲に赤米其外色のあしき米の雑るなどハ、多くハ、其たねをゑらぶ事委しからざるゆへなり。少の手間にて過分の違となる事なれバ、作人たるものつゝしみてゑらぶ

一耕作ハ一種の物を作りてハ悪しき者也と老人の咄を聞伝ふ。能作り当れハ大利を得ると雖、年により天気の不順ニて其一品の作悪しき時ハ迷惑に及ふ者也。只数々作れハ悪しき作ありても、又よき者あり。大切に心得べし。

此段兼て聞覚たる事なれ共時ニ流行の稲有り、其種を専らに作れハ、苗代田植刈揚ホの勝手よき者故一種の稲を多く作る者也。然るに今年文政八酉年夏土用中迄ハ一統豊年ならんと悦ふ処、土用明の頃より北風十日計り吹き、俄に冷気強く、其風にあふたる稲不熟多し。或ハ竹薮家陰谷のそむけによりて風を除けたる所ハ稔りよし。さあれハ農民たる者常々此心得あるべし。右悪風ニて忽天地の陰陽不順になり不熟と成りしハ天災なり、恐るべし〳〵。

一春の耕ハ冬至より五十五日に当る頃菖蒲の初て芽立を見て（菖蒲ハ百草に先立て生るものなるよし）耕し始るものと古書に見へたり。されと此山中ハ大雪余寒気強く草木の芽立も遅けれハ、往古より仕来り言伝又暦を見て考へ可ㇾ申事也。一村の内ニても陰陽の遅速へき事也。

（七二ページ）

○又前漢書に記しをけるハ、穀を種ることハ一色を多くハ作るべからずと。いかんとなれば五穀を始め、色々雑穀数多く作れば、たとひ凶年にても、其中に必利を得物もある事なれば、皆損ずるまでの愁ハなし。若一種を多く作りて、相応する年ハ大利を得る事もあれど、それハ稀にして、災害にあふ事ハ多し。農人必色々を作るべしと見えたり。殊に土地の相応不相応もあり、品々のたねを求め作るべし。

（一一二～一一三ページ）

○さて春の耕しハ、冬至より五十五日に当る時分、菖蒲の初てめだつを見て耕し始る物なり。菖蒲ハ百草に先立て生ずる物なれバ、是を目当とする事也。…すべて田畠共に一

あり。当村ニても白髪と中原雪降やう消時も異なり、されハ雪解ニ随ひ陽気の催しを見合耕すべし。

一春の耕ハ犂て其侭起にて撥くべし。春ハ風多き故□(鋤)て久しく置ハ、土乾キ過うつけて土性ぬくるもの也。

一犂て間を置日数を経れハ雨に逢ひて塊の性ぬけ陰気底にとをして甚悪しき事也。

一犂一擺六と云ふ事有。是ハ一度犂てハ六度撥きこなせという事也。犂事ハいかにも平らかにむらなくかく事ハ数度かきてよし。かきこなす事懇にして塊なからんかため也。細かによくかきたる地ハうるほひ能く、水を保つ故少々の旱ニも乾かすして苗痛す。兎角土細か

(29)

村の内にしても、所により陽気の遅速ある事なれバ、寒気の早くしりぞく所より、段々に耕す心得すべし。 (五一ページ)

又春の耕しハ手に尋で労すとて、犂てそのまゝ耙にてかくべし。いかんとなれば、春ハ風おほきゆへ、すきてかゝずそのまゝをけバ土かハき過、うつけて、性ぬくるものなり。 (五一～五二ページ)

…犂て間ををき、日数をふれバ、雨にあひて、塊の性ぬけ、陰気そこにとをりて、甚きらふ事なり。耕さゞるにハおとれり。 (五二ページ)

○又犂一、擺六と云事あり。 (五八ページ)

…又犂ことハいかにも平らかにむらなく、かく事ハ二三べんもいか程もくハしきをよ

にして和かざれハ作り物の利潤少しと心得べし。殊に苗の根のあしき土には思ひあわす、土あらけれハ肥もむら交りある故也。

一耕しハ肥土斗り平かにすべし。若深くして底の生土を動かせハ、毒気上に揚りて却て作物の育ち悪し。殊更植付前の仕様深くして生土動けハ苗生土の毒気ニ当りて栄へかたし。又苗の立根か底の細土と思ひ合されハ稔りよからぬ者也。惣て穀子ハ立根より生ると心得べし。然る故に根の下に塊もなく、又にか土もなき様に拵へ、肥も根の下に能く行心得すべし。

しとする事也。是かきこなす事の懇にして、塊なからんがためなり。細かによくかきたる地ハ、うるほひをよくたもつゆへ、少々の旱にもかハかずして、苗いたまず。とかく土細かにして和らがざれバ、作り物の利潤少しとしるべし。苗の根、あらき土にハ思ひあハず、糞もむら交りあるゆへなり。

（五二～五三ページ）

…重てすく事ふかくして、生土をうごかせバ、毒気上にあがりて、却てうへ物いたむものなり。…たね生土の毒気にあたりて、生じがたく、さかへがたし。

（五三ページ）

…苗の立根が底の細土と思ひ合されバ、ミのりよからぬものなり。物ごと穀子ハ立根より生ずると心得べし。然故に根の下に塊もなく、又にが土もなきやうにこしらへ、糞も根の下に能行わたる心得すべし。

（五八～五九ページ）

(30)

一土の性により繁くかくべからざるも間にハあるべし。細砂の弱く柔かなる地、灰の如く力なくかるき土抔は、さのミしけく搔べからす。是ホの土ハ少々塊ありとも性をもたせ置力とする也。一偏にハ思ふへからす、所ニより時によりて機転を用べし。

一田も秋耕も宜し。秋稲を刈終りて一日も早く犂立、横何辺も搔き置、白く干たる時又二三辺かき、雪霜ニ逢ワセ置て、来春地の気和する時日高を待て又すき返すべし。秋耕の地ハ草もすくなく春の手回し能稔もよしと云り。

(31)

…但又土の性により、しげくかくべからざるも、間にハあるべし。細沙の地、弱やハらかなる地、灰のごとくちからなくかるき土などハ、さのミしげくハかくへからず。此等の土ハ少々塊ありとも、性をもたせをき、力とする事也。一偏にハ思ふべからず。所により、時によりて、機転を用ゆべし。

(五九ページ)

○又耕す事ハ麦を蒔地の外も大かた秋耕に宜し。秋稲を刈おハりて、一日も早く犂、たてよこ何べんもかきをき、白く干たる時、又かく事二三遍し、雪霜にあハせ置て、来春地の気和する時、日高を待て又すき、かきこなす事、三四へんすれバ、其地さハやかに、…。秋耕の地ハ、草もをのづからすくなく、中うち芸にさのミちから入ず、万づ徳分多し。

(五九ページ)

一夏至ハ五月中天気始て暑し。され共陰気ハ此時始て萌さす。此時も又土をくるもの也。又夏至の後九十日昼夜等し、此時も又天気和す。凡此ホの時を以て田畑を耕さハ甚よしといへり。

此辺にてハ夏至の後耕事ハ大豆も遅き位、小豆麦粟蕎麦蒔畑抔也。心得べし。

○又夏至ハ天気始て暑し。されども陰気ハ此時始てきざす。此時も又土とくるものなり。又夏至の後九十日、昼夜ひとし。此時も又天気和す。凡此等の時を以て、田畠を耕せバ、一度にして五度にも当るものなり。これを名付て膏沢と云て、土のうるほひ和らぐ時なり。皆これ耕してすぐれてよき時なり。

（五四ページ）

一田の角を打事深く打て其土を浚へ出し置べし。左なくてハ荒擺の時耙すミへ行かぬ者ニて、塊土残て悪しゝ。

一畦のぬりやう大事。稲ハ水にて育つもの故少し水洩れたる所ハ稲の出来悪しく稔わろし。畦（アゼ）ハ土を随分丈夫に浸て水の漏らぬ様ニすべし。惣て畦ハ上へ〳〵と上かるもの故、其心得ニて春始て畦を削る時上への平ら斗り削り、下タ平ハ其侭捨置、ひよを畦といふて塗る時心を付穴抔能く〳〵塞き、中犂の時畦の下タ平を能々削り、草のなき様にして置ハ、本畦をぬる時勝手よし。

本畦をぬる時人々一辺つゝ撫てるもの也。予ハ二返つゝ撫て試る
ニ水保もよし。猶むくろ返し跡抔に心を付て能く〳〵浚へ、山畦も
細くならぬ様ニ年々丈夫ニ塗るべし。跡しは打様窪数をかぞへ跡
見合（長一尺七寸二尺位、巾六寸か七寸）

一苗代の事一大事也。右にも述る如く種物ハ生物の根元、秋の稔の元なれハ、大切に拵へて蒔べし。予壮年より心を付るに、苗の悪しきハ稲出来後れ稔迄違ふ者也。苗代ハ犂擺入（レ）念随分地を平かにして、種ハ少し薄く蒔べし。尤不熟の年ハ籾の取様念を入ても生立悪敷者故、種子も少し余り取置平生より厚く蒔べし（苗代地能く拵へ、種を蒔へき所ハ手ニて悉く押へ、草も肥も稲株も皆々底ニ入、肥へ土斗上へ上り、いかにもむらなく拵へて水を澄し、少も障ものなくして蒔べし）。扨又苗代地に冬肥ハ土湧上りて苗生付悪し、夏こへの細々なるを春入て耕へし。又蒔時のこへハ当家代々の仕来ハ冬肥の細々なるにすくもを交せ合、濃糞をかけ置、春に成苗代以前十余日にして、右の肥を打碎き、又よき肥をかけ置（此肥の回りニハ夏肥わら肥を積て、其中に能く〳〵混せて置也）苗代地ニ入来りぬれ共、隣家抔ハ春に成て右の如く肥を拵く。苗代に用るに敢て替る事なし

と承り、文政八乙酉年より春になりて件の通り糞を拵へ苗代に用る也。

予苗代を大切に思ひ種々工夫して先麦を其田に蒔、翌年烟草作にして其次の年苗代にせしか、苗の生立甚よし。如此年々替地にして苗を作りけれハ、麦ハ夫食となり醬油ニもよし、烟草ハ相応の価となり益筋多し。只秋の麦蒔人夫余分いれ共苗の出来よく稲の育早く稔よし。

一苗代水引様、始ハ随分浅く苗の延るニ随ひ少しつゝ深くすべし。尤種子を蒔て五七日の頃晴天見合水を干てよし。斯の如く二日も干せハ早く芽ふきて育つ者也。又常に天気のよき日ハ小畦の端をせき溜水ニすれハ水温りて時刻の移るに随ひ水減りて、苗の葉ちら〳〵水上に出れハ、思の外苗よく延るもの也。中の時頃堰をはつし置ハ夜る迄ニ水湛る也。毎日心を付誠に赤子を育る様にすべし。惣て植付後水の見様至て大事也。晴雨の時夕立昼夜のかけんて述るに暇なし。口傳。

一苗代肥に青芽とて柳の芽立を短く刈て入る事あり。され共此辺ニてハ芽立遅く、何程も芽吹不(レ)申、四五日前に刈て束ひ、日向の水につけてよしといへり。是ハ年々芽立早を求植置（挿木よし）可(レ)申事也。東伯大島居辺を見るに田地の端々ニ株柳多し、彼地ハ芽立早く苗代肥に甚よしと承る。予思らく、此辺早稲刈揚の田に一時早く菜種を蒔育置、折々肥を仕込翌年苗代肥に致度存なから、何となく延引せり。当年文政九の秋より作り初用て試可(レ)申。其段嗣子敬忠試るに至て苗出来立宜敷、続て取計居申候。

一田畑を仕付て後草を去て其根を絶へし。稲莠とて苗によく似たる草あり。此□(草)ハ苗にさきたて茂り栄へて土地の気を奪ひ竊む故苗を妨る也。油断なく取去べし。喩ハ草ハ主人の如し。元より其所に有り来る者也。又苗ハ客人の如し。脇よりの入人なれハ、大低の力を入てハ草を除去かたし。悪きもの、栄へ安きとハ世上の常の事なれハ、草の栄て五穀ホを害するハ甚速か也。此故ニ上の農人は草の未た目に見へぬ内ニ芸る也。ミへて後も芸らさるを下の農人といふ。是ハ土地の咎人といふ者ニて子孫の相続覚束なし。故ニ勤べし慎むべし。

すでに、種子を蒔、苗をうへて後、農人のつとめハ、田畠の草をさりて、其根を絶べし。稂莠とて苗によく似たる草あり。此草ハ苗に先立てしげりさかへ、暫時もさらざれば程なくはびこりて、土地の気をうばひ竊むゆへ、苗を妨る事かぎりなし。由断なく取去べし。喩バ草ハ主人のごとし。もとより其所に有来ものなり。苗ハ客人のごとく、わきよりの入人なれバ、大かたの力を用てハ悉のぞきさりがたし。其上よき物

一畠物ハ苗生して馬耳の如くなる時中打するといへとも云り。苗一二寸土を生出たる時畦中の高下土むら有をハ掻ならし、芸けぬきたる草を田なれハ苗の下ニ踏込ハ直に肥となる。畠なれハ畦の高き所に擺け置、枯て後植物の根の際ニ寄置て土を覆ひ、又其上よりも肥をかくれハ、枯たる草腐り潰れて土よく肥る者也。是を耔と云也。古より耘耔ハくさきり草おほふとて、草の根に枯たる草抔覆ひ置く事也。

ハ生立がたく、悪き物の栄へやすきハ、世上よのつねの事なれバ、草のさかへて五穀等を害するハ甚速かなる物なり。此ゆへに、上の農人ハ、草のいまだ目に見えざるに中うちし芸り、中の農人ハ見えて後芸る也。みえて後も芸らざるを下の農人とす。是土地の咎人なり。　（八四～八五ページ）

○又畠物ハ苗生じて、馬耳のことくなる時中うちするともいふなり。苗一二寸土を生出たる時、畦中の高下、土むら有をバ、かきならし芸り、ぬきたる草を、田なれバ苗の根の下に踏こミ、畠ならバ畦の高き所に擺げをき、かれて後うへ物の根のきハにより置て土をおほひ、又其上よりも、糞をかくれば、枯たる草腐りつぶれて、土よく肥るものなり。是を耔と云なり。古より耘耔ハ、くさぎり、草おほふとて、苗の根に枯たる草かやをおほひをく事なり。

一作物の中□□□□□（打をあらく）打事悪敷、只草の根を懇にうちさりて作りの根に与へかす（脱ら）。又春の中打ハ地を起し、夏ハ草を削殺しからすと心得べし。

一中打ハ始さら〳〵と軽く打、二返めハ深く、三辺めハ浅きかよし。何如となれハ初一辺ハ草の萌たゝんとするを削殺し、二辺め深きハ植物のまだ立根斗にて脇根の栄ぬまに底の塊をも打碎き、根底の気能回る為め也。三辺めの時ハ早脇根蔓こる故深く強く打てハ作物痛事有。中打する度毎に干たる細土の底に入て、植物の細根是に思ひ合せ栄へ蔓ひこる心得所要也。

(37)

（八五～八六ページ）

○又五穀其外の中にちすること、…懇にうつことなり。…尤物により、時にハよる事なれども、強くあらく中うちする事ハよからぬ事なり。只草の根を懇にうちきりて、苗の根にあらくあたるべからず。

（八六ページ）

○又曰春の中うちハ地を起し、夏ハ草を削殺し、からすと心得へし。

（八六～八七ページ）

○又中うちハ始の第一遍ハ深きを好まず。さら〳〵とかるくうち、二遍めハ深くすべし。三遍めよりハ次第に浅きがよし。いかんとなれバ初の一遍ハ草のめだたんとするを削殺し、二遍めの深くうつ事ハ、うへ物いまだ、立根バかりにて、わき根ハさかへぬ間に、底の塊をもうちくだき、根底の気、

一穀子ハ立根の精より生る者なれハ、実入を求る類の物ハ立根のさきを能養ひし糞も立根の糞も立根のさきに能く行渡る心得肝要也。又田を芸時ニ（田ノ草取ヲ云フ）草なくとも浮根浮葉をハ取り去るべし。是ニ精をぬかすましき為也。又中打ハ湿りたる時打たぬ様にすべし。日と風とニあひて土白く干たる時一辺ニてハ湿りて黒き時四五辺も打たるニ勝るもの也。又細土を作物の根に能ならし置ハ能栄へ、旱ニも痛ます根くはりよくして、風雨ニも倒れす稔りよし。

よくめぐるためなるべし。三遍の時ハ、早わき根やうやくはびこるゆへ、深く強くうてバ、苗いたむ事あり。然故に如レ此ぜん〳〵に浅くうつ事也。いかさま中うちする度ごとに、干たる細土の底に入て、うへ物の細根是に思ひ合てさかへはびこる心得する事、肝要なり。　（八七～八八ページ）

○又中うちハ、しめりたる時、必うつべからず。日と風とにあひて、土白く干たる時一遍うちたるハ、しめりて黒き時、四五遍もうちたるに勝るものなり。…其ゆへ中うちをさい〳〵すれバ、上の日にあたりたる細土底に入、うへ物の根に陽気を加へ、扨上なるかハきたる、細土を以てぜん〳〵に根によせおほひ、うるほひに合せぬれバ、うへ物さかゆる事甚し。且又、根の土厚けれバ旱にも痛ず、風雨にもたをれず、…

（八九～九〇ページ）

一芸事心あしくてハ悪しき。心を静に一しほ委敷懇にすべし。是も土地ニより植物夫々の見合あるべし。

一田畠に良薄あり、土に肥磽あり。薄く瘠たる地ハ糞を用るハ農事第一の事也。薄田を変して良田となし瘠地を肥地となす事、是糞の力養ひにあらざれハ能ハず。故に糞壌を集め貯る事を専にすべし。糞養を能用ひ地力を助て作物ニ念を入ざれハ、何如ぞ秋の稔あらんや。此辺ニてハ草肥を専らとする事なからん。是も五六月盆迄の草を第一刈込事肝要也。秋に成てハ草の精ぬけて肥ニ悪しく、惣て谷々の草よし。峰峠の草姫笹抔ハ悪し。夏草を刈取る事ハ自力又下人の働牛の善悪によれり。然共近来ハ下男に草刈の上手も稀也（此段草刈の下手なる者ハ〈草も〉悪しく無数、其上牛のくら直し方悪けれハ荷物はかるふても牛に障り牛の苦ミとなり、色々疵抔付、一疋の牛にても多分損限に成事多し。喩給銀少々余分ニても農功の下人を召抱可申事也。去るに因て代々農業を励む百姓ハ手つから牛の鞍を調へ、下人の遣ふ牛の鞍迄心を付、或ハ調て遣ハす。勤事無手抜程

…すべて、万の中うち、芸る事、心あらくてハなりがたし。心をとゞめで、一しほくハしく懇にすべし。但是も又土地によりうへ物により、それ〳〵のほどらいハあるべし。

（九〇ページ）

田畠に良薄あり。土に肥磽あり。薄くやせたる地に、糞を用るハ、農事の、急務なり。薄田を変じて、良田となし、瘠地を、肥地となす事ハ、これ糞のちからやしなひにあらざればあたハず。…近世ハ人多く、且飲食のついへかぎりなきゆへ、歳にかへ、いこへをく事ハ云に及バず、種蒔こと年中、段々うちつゞき、間もなく、しげければ、地の力衰へよハりて、発生の気乏きゆへ、糞養をよく用ひ、地力を助て常にさかんにせずハ、いかんぞ、秋の収め思ふやうならんや。是によって、糞壌をあつめたくハゆる、ハかりことを専にすべし。

（九一～九二ページ）

の農人ハいつまても相続するもの也。

跋

千早ふる神代にハ天の邑君を定め給ひて穀物の〻種を狭田長田に植しめ給ひしより、代々生ひはひこほりて芦原の中津洲も安国と豊かに饒ひて外ツ国に勝れて芽出度　大御国とそなれりける。然か有を今の世ニなりてハ田作る事は賤の男の業となん思ひ誤れる人もさハあれと、久方の天か下の泰平なるも国家の安く穏なるも皆多那津もの〻稔りゆたけき恵ミよりぞ起りたる事〔の〻稔りゆたけき恵ミよりぞ起りたる事〕（ママ）にしあれば、世の中の人ことわさ繁きなるにも、殊ニ尊ふときハ此農の道ニなんありける。曩ニつくしの国人宮崎安貞、貝原篤信大人のものしおかれし文ミにも、春の田の耕より秋の田の刈穂を廬にとり納る迄をつはらに書あらハせると雖も、其国所ニよりてさむさとあた〻かさのけちめも聊あれハ、天か下をを一筋ニも論ひかたくとなんありける。此むねを徳山敬猛主深く考へて年し〳〵農の道に心を尽し身をはたかしめて、此里に能叶ひてあきの稔りの助となるへきすへを、自ら心み知りて其趣を懇ろに書あつめて、子孫養育草となん号て永く伝て農に幸を得ん事を謀られけるハ、いとしまめやかなる心はへニなん

ありける。此文すら子孫の八十連属迄もはらに守らひて農の道たに勤め勤るものにしあらハ、一粒の種より千稲五百稲のおひたち茂りて、年毎ニ幸ひを得て朝な夕なに飯炊く烟も厚く立続きて、新巣の凝烟の八束たる迄家富栄へなむ事しるくそありける。己敬猛主の近き友かきなれハ其故を一件書添へてよと求めらるゝに任せて、いな舟の否とも謂ハす、愚かなる筆を取る。

文政十とせといふとしのしはす中の四日。かくいふハ福田の宮ニつかへまする藤原の重行。

補註（一六九ページ）

本底本のこの個所（…山野原野開らけ荒亡の地なく震巽坎艮坤の八の卦をなし、…の地なくと震巽坎艮坤の間）にはあきらかに大きな脱落がある。この個所について、小野翻刻本によって補うとつぎのようになる。

地なくのあとにつぎがつづく。

耕作の道盛なり、されば諸作多き中に分て稲麦の両種は陰陽相応の草にて五穀の中の長たり、両種の成熟を考ふるに十月農功終りて諸作取収、うへるものあらざるに、此月麦を蒔入る事陽気地中に萌故なり、十一月中冬至地雷復の時一陽初て地上に起り初る頃、麦ひとり生出、十二月地沢臨二陽、正月地天泰三陽、二月雷天大壮四

(41)

陽、三月沢天夬五陽如」此此段々陽気につれて成長し、四月乾為天の時陽極て熟し、其地乾けるは陽なり、又蒔うゆるは男にて陽の物育やしなふに陽を以てす、麦の陽草たる事如」斯、都て草木とも春生して秋収るに、麦ばかり夏四月収るによりて四月の異名を麦秋ともいへり、稲は五月中夏至天風姤の時一陰初て来て苗を移し、六月天山遯二陰、七月天地否三陰、八月風地観四陰、九月山地剝五陰、斯のごとく月毎に一陰づゝ地下より上るに随つて生立、十月坤為地の時陰極りて実のる、其水田の坤なるは陰なり、とり立るは女にて陰の物養ひ育つるに陰を以てす、稲の陰草たる事如」斯、易はもろこしの帝王伏羲氏初て乾兌離

（小野翻刻本三九二ページ）

(42)

岡山大学経済学会雑誌14(1),1982, 137～179

〈Materials〉

"*Nōgyōshisonyashinaigusa*"
by Yoshitake Tokuyama, 1826

Haruki Kandatsu

農業小孫養育草序

是大文本名清延翁者子孫爲相續雖子遺教訓を著述たり〻彼書を熟読信用して勤務行の三ヶ條を守り所く星霜を歴年を経て後隱遁を成二階より獨居して閑寂を楽し倩思へらく我世渡りこ千辛万苦と責せ一年より思ひくらべ五穀の安楽を家らさせ私に明君恩惟して遠教訓を考へ此四季に経日三界無安猶如宅衆苦充満甚可怖畏と説示あり三の世界の安楽なる事は如何なる家の四と成て所〻家生の若患世の中に交渉して諸間是々滿々時々山の奥迄此世界より他なるもの一人も若者無既あきなるべし基なるもの所以無と生と者